

大愚良寛と中国*

北 嶋 藤 郷

序章

良寛(号大愚)(1758-1831)は、日本国の江戸時代後期の禅僧であり、文化人である。当時の日本国は幕藩体制下にあり、鎖国時代ではあったが、良寛は中国に憧れ、中国の文化を尊崇した。彼は日本国の曹洞宗の開祖道元のように、中国の大地を踏み、諸寺を歴訪したいという夢を抱いていた。道元は鎌倉時代初期の禅僧で、1223年に入宋して、天童山で如浄禅師に師事した。道元の主著『正法眼蔵』は良寛のバイブルのような存在であった。

当時の近世日本社会の仕組みは、江戸幕府と藩という封建領主制度であり、小農民で構成される村を、最高の領主となった幕府と、幕府から領地を与えられて軍役に服する大名とが支配し、小農民から主として年貢米を徴収することで成り立っている封建社会の体制であった。良寛の生きた時代背景は、日本国の封建社会が末期に入り、オランダ、イギリス、アメリカ、ロシア諸国の商船が、絶えず日本の扉を叩きにきた時代であり、幕藩体制の崩壊と相まって「開国」と「維新」への社会の驚進や近代国家の創立は、阻むことのできない大きな潮流となっていた。

良寛(幼名栄蔵)は、日本海に面した越後(新潟県)の出雲崎で、宝暦8年に生まれた。江戸時代の佐渡の金銀産出量は、世界屈指であり、当時の出雲崎は、佐渡の金の陸揚げ場所として栄えていた。良寛の生家の橘屋山本家は、代々名主職と神社の神官を務める当地第一の名家であった。名門橘屋は廻船問屋として、千石船などの通行権を握っていた。

現在、橘屋の蔵書目録が伝えられているが、『論語』、『孟子』、『詩経』、『蒙求』などの漢籍も含まれている。幼い時、良寛は父親の前で、「十三経」をそらんじたという逸話が残されている。日没後も庭の石灯籠の明かりで、『論語』を読み耽けていたという。少年期において、良寛はすでに人を驚かせるほどの読書量と学識を持っていて、記憶力も抜群であった。

良寛の父以南は、北越の宗匠と謳われたほどの俳人で、文芸の才には秀でた人物であったが、政治家の器ではないうえに、経済の人でもなかった。良寛の母秀子は、佐渡鮎山の近くの相川出身である。彼女はやさしく穏やかな人柄で知られ、嫡子良寛をはじめとする四男三女を育て上げる一方で、俳

諧にうつつを抜かし、留守がちな夫を助け、衰微の一途を辿る家業を支え続けた働き者であった。当時、船の大型化につれて暗礁の多い出雲崎はきらわれ、良港をもつ隣の尼瀬町に出入りするようになり、また以南の政治性のなさから、幕府の通達を記した「高札場」が、橘屋の門前から尼瀬の名主京屋の門前に移されるということもあった。つまり、政治上の実権も経済上のことも、尼瀬に移りつつあったという社会的状況にあって、良寛の生家は家運が傾きつつあったのである。

良寛は13歳の頃から6年間、北越の四大儒の一人である大森子陽の狭川塾で学んだ。良寛がここで学んだのが「四書五経」であり、『文選』、『唐詩選』、『孝経』、『小学』、『三字経』などであった。後年の良寛の詩に見られる『論語』、『唐詩選』、『文選』、『孝経』などの語句の応用は、この時代に受けた教育の現れであろう。

良寛は、文芸の才は父親から、もの思いに耽る、やさしくて内向的な性格は、母親から受け継いだものであらうと考えられる。良寛は18歳の時、町名主であった以南の見習い役となるが、ある日突然役目を放棄して出奔、諸国を放浪した後、光照禅寺の玄乗破了和尚のもとに駆け込み、落髪して仏門に入った。その時のことを良寛は、「少年父を捨てて他国に走る」（少年捨父走他国）と詩に詠んでいる。「捨父」の悔恨は終生消えることはなかった。

良寛の出家の原因にはいくつかの説がある。①18歳で名主見習い役になった折、代官と漁民との間の諍いが生じ、良寛が仲裁に入った。彼は生来世事に疎く、両者の悪口雑言をそのまま相手側に伝えたので、事態はいっそう険悪になった。彼は代官にその愚かさを咎められた。②名主見習いとなって間もない頃、佐渡奉行が出雲崎から佐渡に渡ろうとした。しかし奉行の駕籠の柄が長すぎたので、どの舟にも乗せられなかった。それを見た良寛は「それなら柄を短く切ったらよいだろう」といった。困っていた船頭は喜んで、彼の言葉にしたがった。このことにより佐渡奉行と名主との間に対立が生じた。③良寛は、名主役を受け継いだが、盗賊の死刑に立ち会わされ、人の世の苛酷さや命のはかなさなどを感じた。

異曲同工の出家入門の遠因説はいろいろあるが、結局良寛自身の性格的なものが大きいであろう。読書好きで、引っ込み思案の良寛は、名主の「昼行灯」と人々から陰口をいわれた。それに加えて、良寛が15歳の安永元年より、天災や悪疫が相次いで起こった。大飢饉のために餓死者が続出し、麻疹の大流行により幼児が多く死亡した。このような天災や悪疫は、人々の生活を困窮に追い込み、乞食に身を落したり、売られて行く子供たちもいた。このような惨状を見るにつけ、やさしく多感な良寛の心はひどく痛んだことである。

う。彼の"無常観"は、しだいに仏門に傾いていったと考えられる。

円通寺修行時代

光照寺に良寛が滞在した4年間は、読書に没入した時期であった。寺の蔵書は主に仏典であるが、特に『禅林類聚』に没頭したらしい。良寛は、破了和尚のおおらかな人柄や深い学徳に引かれ、仏典と共に禅林の詩篇を数多く習得した。良寛22歳の時、たまたま越後に巡錫して来た大忍国仙和尚が、受戒会のために光照寺に立ち寄った。良寛のただならぬ器量を見抜いた国仙は、彼を出家させ、大忍国仙の門弟として"大愚良寛"の法号を与えたという。(玄乗破了は剃髪師であり、大忍国仙は出家得度師ということになる。)良寛は本師に従い、はるばる備中国(岡山県)玉島の円通寺に行き、約12年間、雲水として修行をした。午前3時の起床から午後9時の就寝まで、4回の座禅と2回の講義を含む厳しい日課であった。良寛は他の誰よりも早く座につき、懸命に励んだ。良寛の学問修行の最も充実した時期ではあったが、このようにもあまりにも生真面目であったために、雲水の中で、彼は孤立した存在であったであろう、と推察される。

良寛が大忍国仙から受けた講義は、何ととっても道元著『正法眼蔵』(写本60巻本)であったであろう。円通寺修行時代に良寛が読んだ書籍を、寺の書籍目録から抜き出せば、『華嚴経』、『維摩経』、『金剛経』、『梵網経』、『六祖壇教』、『臨濟録』等々である。これらの書籍の語句を後年の良寛は自作の詩に応用している。

良寛は円通寺での修業時代を思い返して、後年次のような漢詩を詠んでいる。柴を運んで仕事に努める時は、龐居士(中国禅宗八祖馬祖の弟子)が柴を運んで悟ったことを思い、碓を踏んで仕事に努める時は、六祖慧能(中国禅宗)が碓を踏んで悟ったことを想起するのである。

憶在円通時	憶う、円通に在りし時
恒歎吾道孤	恒に、吾が道の孤なるを歎きし
運柴懷龐公	柴を運んでは、龐公 <small>ほうこう</small> を憶い
踏碓思老盧	碓を踏んでは、老盧 <small>らうろ</small> を思う
入室非敢後	入室、敢えて後るるに非ず
朝參常先徒	朝參、常に徒に先んず (以下略)

円通寺に来て、10年ほど修行を積んだ良寛が33歳の時、本師国仙から「印可の偈」(雲水修行証明書)を与えられる。まずはその七言絶句を紹介し

たい。

良也如愚道転寛	良や愚の如く道うたた寛し
騰々任運得誰看	騰々として運に任す誰か看を得ん
為附山形爛藤杖	為に附す山形爛藤の杖
到处壁間午睡閑	到る処壁間にして午睡の閑

「良寛や、お前は一見愚者のようにも見えるが、その修行の度合いは、極めて深くて広いのだ。お前の何ものにもとらわれない、すべてを自然の運行に任せきっている伸びやかな心境は、誰が見抜けようか。よって山だしのままの藤の杖を記念に与えよう。これからお前の行く先々で、たとえ昼寝をしても、それがそのまま修行となるように、ゆったりと自由自在な座禅をなささい。」と禅定で締めくくる。達磨大師の「面壁九年」の故事を想起させる結句である。さすが本師国仙は良寛の人となり、悟道のありようを的確に看破している。良寛はそのことを誠にありがたく思ったのであろう、この「印可の偈」だけは生涯肌身離さず大切に保持した。

大忍国仙は良寛に対して、師に先立って死んだ若い弟子の顔回を評価する孔子の歎きを重ねて想起している、という説がある。『論語』の中で、孔子は「回や愚ならず」（「回也不愚」）^①と独白しているからである。「良也」と呼びかける本師は、良寛が顔回のように、おおももの弟子であることを見抜いていたのである。

良寛に「印可状」を与えた翌年に、大忍国仙は俄かに遷化する。良寛は、「印可状」を大切に懐にしまい込み、円通寺から行方をくらます。40歳近くになって、ひょっこり郷里の越後に舞い戻ってくるまで、彼の足取りは全くわからない。6年間も良寛は長い長い「午睡」を取っていたのか？おそらく彼は本州、四国、九州と諸国行脚をしていたのであろう、と推測される。近藤万丈が『寝覚めの友』の中で、土佐国で良寛に邂逅したという話しはよく知られている。草庵の机上には自由哲学の書『莊子』が置いてあった、と万丈は証言している。日本の仏教は道教の『莊子』と儒教の『論語』を融合した「中国仏教典」に拠っていたので、良寛は『莊子』と『論語』に多大の関心を寄せていた。これらの中国古典が彼の思想的背景をなすものであることは、十分に注目に値する。

また、「良寛は雲水して、九州の西長崎に行脚し、中国への密航を企てるが、舟子は彼の檻樓を纏った身形をみて拒否した」^②という説がある。「良寛は、空白の4年間に、清国へ密航したのではあるまいか」という臆説を公

表した著名な良寛研究家がいるが、氏は想像を確信にしていたものと思われる。当時は鎖国日本であり、わずかにオランダと中国くらいが通行貿易の許された国であったが、良寛が国禁をおかしてまでも中国に密航したとは、筆者には考えられない。良寛清国密航説は、次のような点で無理がある。①渡航手形は、当時よほどのことがなければ下付されなかった。まして襤褸を身に纏った、渡航費用の乏しい良寛に「通行手形」（護照）が書き与えられることは、まず考えられない。②密航は、莫大な費用をつめば、或いは可能であったかも知れない。もし船主に無断で隠れて船に乗った場合、航海の途中で見つければ海に投げ入れられてしまう危険性があった。③運よく中国に渡れたとしても、帰国した際には、もっと危険があった。もし良寛が中国に渡っていれば、帰国後に、いろいろな理由をつけて刑罰に処せられたことであろうが、そのような形跡は皆無である。（当時の長岡藩で、密貿易をした大商人が処刑されている。国内でも通行手形のない者は、厳罰に処せられた。関所では「入り鉄砲に出女」は特別視されていた。）

良寛が護照を持っていて、その上費用もあれば、密航などという命にかかわることをする必要は、全くなかったわけである。ただし、当時の知識人で、中国に渡りたいと望んだ人は多かったであろう。しかし通常は先ず不可能であろうから、せめて長崎へ行って中国人に接し、中国の一部の事情を知ること満足せざるを得なかった。自筆パスポート「大日本国大忍国仙の真子沙門良寛」を携え、良寛がそのような期待を抱いて、長崎へ出向いていったことは、容易に推測されることである。

良寛の漢詩

家郷を捨て、宗門を捨てた良寛は気がついてみると、故郷の越後に舞い戻っていた。当地に巡錫してきた大忍国仙に随行して、円通寺に出かけてから、18年の歳月が流れ去っていた。故郷に錦を飾るのではなく、半ば破れた墨染め衣を身に纏い、一衣一鉢の乞食僧としてひっそりと帰郷したのであった。郷本の空庵をはじめ、空庵を転々とした後、40歳で国上山の五合庵に定住する。良寛は五合庵期から情熱をもって漢詩を作り続けるが、良寛の漢詩はすべて思想詩であると断定することが可能である。良寛は「五合庵」と題する、次のような詩を残している。生活を極限にまで簡素化した清貧の思想が伺える。

索索五合庵
実如懸磬然

索々たる 五合庵
実に けんけい 懸磬の如く然り

戸外杉千株	戸外 杉千株
壁上偈数篇	壁上 偈数篇
釜中時有塵	釜中 時に塵有り
甑裏更無烟	甑裏 更に烟無し
唯有東村叟	唯 東村に叟有りて
頻叩月下門	頻りに叩く 月下の門

当時の僧侶の大切な仕事は、漢文を習い漢詩を作ることであった。平安時代の仏教の坊主は、だいたい仏像を彫ったり、仏画を書いたりして、美術の専門家になることが必須条件であったが、鎌倉、室町、江戸時代になると、「大蔵經」を土台にして、物を読み思量することが最も大切な条件となった。

解良栄重は『良寛禪師奇話』（第50段）の中で、「師ノ平生ノ行状、詩歌中二具在ス」と書いている。しかし良寛の「漢詩」は、難解であるため、漢字で綴られた韻文の熟語がどのような意味をもつかを理解し、さらに言葉が互いに響きあう詩篇全体のもつ象徴的な意味も理解しなければならない。良寛の漢詩の訳注者は、良寛に負けないだけの教養と学識無しに、彼の詩の世界を語ることはできない。

本色行脚僧	本色は 行脚の僧
豈可存悠悠	豈 存して悠々たる可けんや
携瓶辞本師	瓶を携えて 本師を辞し
特特出郷州	特々 郷州を出す
朝極孤峯頂	朝には 孤峯の頂きを極め
暮截玄海流	暮れには 玄海の流れを截つ
一言若不契	一言す 若し契わずんば
此生不誓休	此の生 誓って休せずと

「改めて本師の在した円通寺から発足し、玄海の荒波をわたったと読み直した。道元禪師は、博多から船出して明州の慶元府寧波（浙江省）に上陸された。道元禪師の御あとを慕いての行脚であれば、先ず天童山景德寺への参拝が順序であろう」と飯田利行氏は、著書『良寛詩との対話』（127）で述べている。一方、谷川敏朗氏は『校注 良寛全詩集』（306）の中で、「玄海」は「深く静かな海」と注釈している。筆者は、良寛の決死行ともいうべき中国への雲水行脚説をすでに否定した。飯田氏は「玄海」は玄海灘を意味するとして、渡航説の証拠にしているが、「玄海」は「孤峯」に対する普通名詞

であり、「深く静かな海」が正しい。

飯田氏の解釈には無理がある。良寛詩を語ることは、自己の蘊蓄の限界を、世にさらけ出す覚悟がなければならない。

良寛詩を中国古典文学との比較で考察してみたい。良寛の最も愛読した中国古典は『詩経』、『離騷』（『楚辞』の中に収められた屈原の作）、「古詩十九首」（『文選』に見える総名）であり、彼がもっとも崇拜した詩人は、「帰去来の辞」で知られる陶淵明、隠遁の詩人寒山、王維、詩仙李白、詩聖杜甫、白居易、蘇東坡であった。杜甫と李白は共に参禅した盛唐の詩人であり、蘇東坡は禅に参じた宋の時代の詩人で、王維も仏教に帰依していた。特に良寛が強く影響を受けたのは、漢籍では『寒山詩集』であり、仏典では『法華経』であった。寒山や拾得の行き方や考え方に、良寛の感興を引くものがあつたのであろう。寒山は山中に隠棲して、心の赴くままに行動した詩人だ。

良寛は、中国の古詩や名句に精通し、これらを自作詩に応用したり、部分的に借用したり、中国の詩人の詩に対応する詩作をも試みている。彼は詩の中に、中国の典故や熟語を数多く引用している。彼は作詩の際、中国の古典詩からインスピレーションを得たといつて過言ではないであろう。

良寛は自作の漢詩について、次のように詠んでいる。

孰謂我詩詩	孰 ^{なれ} か 我が詩を詩と謂わん
我詩是非詩	我が詩は 是れ詩に非ず
知我詩非詩	我が詩の 詩に非ざるを知りて
始可与言詩	始めて ^{とも} 与に詩を言う可 ^べ し

良寛はこの詩の中で、「私の作る漢詩は、一般にいう漢詩ではない」と言明している。当時の日本国で作られている漢詩は、唐時代に確立した近体詩のスタイルが主流であつて、つまり定型・押韻・平仄の技巧が厳密であつた。良寛はこれらに準拠しない漢詩、換言すれば、古詩や近体詩の範疇を超越した漢詩を作り出したのである。いくらスタイルを整え、珍しい、美しい章句を列挙しても、心中に生じた感動や思考を表現しなければ、漢詩を読む人々は感動しないのだ、と良寛は考え、「我が詩は、是れ詩に非ず」という言葉になつたのである。良寛は近体詩を放棄することで、自作の漢詩に深い思想と哲学を獲得した。ここで良寛の詩は完成の域に達したのである。

良寛の漢詩には、清貧で清らかな哲学的思索の詩のみならず、冷徹な観察力と雄大な想像力を駆使して、厳しい宗教性、痛烈な社会批判の漢詩も含まれていることを忘れてはならない。

良寛の晩年、68歳の時に、中国の四川省の蛾眉山から、縦一丈余、直径二尺五寸余もある橋杭とおぼしき古材が越後の宮川の浜に漂着した。この巨木には、頭部に獸頭人面の彫刻があり、下部は海水の浸食により糜爛していた。胴体には楷書で「蛾眉山下蕎」⁽³⁾と篆刻されていた。良寛は、李白の「蛾眉山月の歌」を念頭において、「蛾眉山下橋杭に題す」という、次のような漢詩を詠んだ。

不知落成何年代	知らず、落成は何れの年代ぞ
書法適美且清新	書法適美、且つ清新
分明我眉山下橋	分明なり、我眉山下の橋
流寄日本宮川浜	流れよる、日本宮川の浜

この重量感ある橋杭は、三峡を下り、東海に出て、玄界灘を経て日本海へ、延々六千キロの旅をして越後の宮川の浜辺に漂着した。良寛は、この時すでに老境に入っていたが、自分への贈り物のように感じた。李白その人が、良寛に会うために、はるばる越後を訪れたような錯覚を覚えたのであろうか。杜甫が「夢李白」、「天末懷李白」そして「贈李白」という詩を詠んでいるように、良寛も「李白賛」（李白の絵に書き添えた詩）を残している。

1990年の夏、日中交流十周年の年に、良寛のこの七絶の詩碑が、中国仏教の三大霊場である蛾眉山下の一角に、日中両国の共同事業として建立された。詩碑は越後で彫られ、中国に搬入された。さらに10年後の現在では、この詩碑の近くに小学校が出来て、良寛小学校と命名されたと聞く。これはすぐれてめでたい快挙である。

良寛の書

良寛はまた書道の大家でもあり、書道の聖人と尊崇された空海（弘法大師）と比肩して評価する学者もいるほどである。（日本には、「弘法筆を選ばず」とか、「弘法も筆の誤り」といった諺もある。）

良寛遺墨には、そのまま彼の豊かな心が表現されていて、魅力的である。芸術性の高い良寛の遺墨に見られる詩歌を通して、彼の高い人生観や社会観に触れることが可能である。

書道はなんといっても中国が本家本元である。特に漢字は、日本人がいくら努力しても、中国の書家には及ばないように思える。良寛の字体は、勿論中国の書道を基本にしているが、彼は棒高跳選手のように、それをいとも軽やかにクリアして、中国の書家にも書けないような書を残した。良寛の書法

を例えれば、「燕が碧空を飛翔するような、胡蝶が花園を舞うような」従来の束縛を離れた、自由奔放の名筆家、書芸の人でもあった。彼の筆技が醸し出す美的な趣は、禅宗からの影響も大きい、といえるであろう。

書体から良寛書の特徴を分類してまとめると次のようになる。

〈草書〉 良寛が唐代の高僧懐素の『自叙帖』や『千金帖』などを臨模して学んだというのが定説となっている。また、張旭、王羲之、孫過庭なども学び、たんなる懐素の模倣ではなく、「懐素体の良寛調」を確立した。良寛は毎朝、懐素の「千字文」を指で空になぞって練習したといわれている。草書は良寛のトレードマークである。

〈楷書〉 良寛の楷書には、大字はほとんどなく、字粒の小さい細楷がほとんどである。中国の名跡に典拠を求めることは難しいが、陶弘景、張旭、王羲之、黄山谷、褚遂良などが考えられる。良寛の細楷は際立って個性に富んでいる。

〈かな〉 良寛は伝小野道風『秋萩帖』を臨模することが好きであった。この本は、良寛が40歳の時に刊行された、木版本であるが、良寛の手沢本として、現在でも保存されている。単に『秋萩帖』の模倣に終わっているのではなく、「秋萩帖体の良寛調」を完成している。

〈消息〉 中国でも日本でも、書道史に残るの名品の中に、書簡の占める位置は高い。良寛の書簡は、260余通残されているが、漢詩や和歌を書いた作品と同様に、芸術性の極めて高いものが多い。

終章

良寛が愛読した、『正法眼蔵』の第一「現成公案」の中に、「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするゝなり」という文章がある。仏道を学ぶことは、すなわち自己を学ぶことであり、自己を知ることである。さらに自己を知るといことは、自己を忘れることである。このような表現は、道元独特の筆の運びである。

良寛は現代人の我々の生と比べて、対極の生を営んだ名僧である。彼の生は自己を知ることによって、自己を忘れ、“有”ではなく“無”の上に立つ。良寛には物を蓄えたり、物を所有したりする、という思想はない。すべてを捨てて、何も残さず、何も欲せず、一切を放下し、無一物の生活にこそ“優遊”たる充足があると考えているのだ。そういう清貧の生き方の中で、良寛は豊かな詩歌を紡ぎ出した。良寛の代表作として知られる「生涯身を立つに懶く」の漢詩は、良寛の心事を最もよく表現していると考えるのでここに引用する。

生涯懶立身	生涯 身を立つるに懶く
騰騰任天真	騰々として 天真に任す
囊中三升米	囊中 三升の米
爐邊一束薪	炉辺 一束の薪
誰問迷悟跡	誰か問わん 迷悟の跡
何知名利塵	何ぞ知らん 名利の塵
夜雨草庵裡	夜雨 草庵の裏
雙脚等閒伸	双脚 等閑に伸ばす

生まれてこのかた、世間でいう立派な人になることには気がすすまず、自然のままに、のほほんと過ごしている。頭陀袋に三升の米と、炉辺には薪が一束あるのみだ。それ以外草庵には何も無いが、これで暮らしは充分だ。誰が迷いだの悟りだのにとらわれた古人の跡を求めようか。また、どうして名誉や利益といったこの世の煩わしさに関わろうか。夜になって雨になれば、静かな雨音につつまれた庵の中で、両足を思いのままゆったりと伸ばして過ごすばかりだ。

良寛にとってはこれが解放感にひたる最高に幸せの時、至福の時なのである。萱ぶき屋根にしとしと降る雨音はかえって静寂を引き立たせよう。"無の世界"に良寛は充足しているのだ。無我の中にこそ、生の充実がある。現代人が良寛の生きざまに心惹かれるのは、そこにこそ真の豊かさを見るからであろう。

曹洞禅の実践から、良寛は「只管打坐」、「托鉢行脚」、「山中草庵独居」の厳しい生活を続けたが、時には托鉢の途中、里の子供たちと毬つきをして遊んだり、また農夫と酒を酌み交わし畦を枕に昼寝をしたなどといった、数々の心の癒されるエピソードでも知られている。

越後の片田舎で、飄逸の乞食僧として世を終わった良寛は、閉塞状況の時の歯車の軋みの中で、究極の場面で忽然と現れ、「今なぜ私（良寛）のように生きたいのか？」と現代人に激しく問いかけてくるのだ。

註

- * 本稿は中国・北京大学にて開催された「世界良寛研究会」（2001.5.3）の研究発表に加筆訂正したものである。

(1) 『論語』の「為政第二」（『論語』東京：博文館文庫、1939. p. 15.）
吾與回言。終日不違如愚。退而省其私。亦足以發。回也不愚。

(吾れ回と言うこと終日、違わざること愚の如し。退いて其の私を省するに、亦た以って発するに足れり、回や愚ならず。)

- (2) 西郡久吾編述『北越偉人沙門良寛全傳』東京：象山社（復刻版），1980. p. 271.
 「或る人曰く、禪師雲水して西長崎に行脚す、蓋渡清求法の意志ありしが如し、愧缺抹揺九萬翼漫學鳴鳳在彼崗の詩其氣概を想見すべしと、舟子其乞巧僧に類せしを以って之を拒絶したる為に素懷を果さざりしか。」
- (3) 鈴木牧之『校註 北越雪譜』三条：野島出版，1970. p. 290では、漂着した木柱を図入りで紹介している。

参考文献

- 谷川敏朗『校注 良寛全詩集』東京：春秋社，1998.
 谷川敏朗『良寛の生涯と逸話』三条：野島出版，1975.
 高橋庄次『良寛伝記考説』東京：春秋社，1998.
 柳田聖山『沙門良寛』京都：人文書院，1993.
 中野孝次『風の良寛』東京：集英社，2000.
 中野孝次『道元断章』東京：岩波書店，2000.
 中野孝次『生きる知恵』（上・下）東京：日本放送協会，2001.
 齋藤廣作『良寛詩と中国の古典』新潟：考古堂，1995.
 飯田利行『良寛詩との対話』埼玉：邑心文庫，1997.
 S. ゴールドSTEIN, 水口志計夫, 北嶋藤郷『良寛 短歌・俳句選』（英訳）新潟：考古堂，2000.
 加藤信一『良寛遺墨の精粹』（S. ゴールドSTEIN, 北嶋藤郷英訳）新潟：考古堂，1997.
 柳田聖山「良寛は私です」（全国良寛会会報93号）新潟：全国良寛会，2001, pp.8-21.
 北嶋藤郷「世界に伝えたい良寛のこころ」（「良寛」30号）新潟：考古堂，1996, pp. 36-41.
 中野孝次×北嶋藤郷<対談録>「新潟の文化を考えるフォーラム：現代人にとって良寛の生き方とは何か」（新潟県文化祭；2003年9月21日）—『人文社会科学研究所年報』（No. 2）敬和学園大学，2004. pp. 35-67.
 中野孝次『良寛に生きて死す』（聞き手 北嶋藤郷）新潟：考古堂，2004.